

玄奘三蔵遺骨の争奪戦

人が亡くなった時、遺体をどの様に扱うべきなのだろうか。ミイラ化して未来永劫の生を託そうとすることもあれば、鳥葬や水葬といった埋葬もある。地域や宗教によって多様な埋葬方法が見られるが、現代の日本社会においては、火葬された遺骨を埋葬するという方法が一般的であろう。そんなごく常識的な話題から本書を紹介するには理由がある。本書が取り上げる歴史が、日中戦争から現代にかけて日本、中国、そして台湾との間で繰り広げられた、遺骨をめぐる争奪戦ともいえるべき複雑な事情を有しているからである。玄奘三蔵の遺骨が分骨された事実を通じて、信仰や宗教的な背景とともに、国際関係史や日中戦争、「文化冷戦」といったキーワードを浮き彫りにしているのである。

新野 和暢



坂井田夕起子著
誰も知らない『西遊記』
——玄奘三蔵の遺骨をめぐる
東アジア戦後史

B6判 274頁
龍溪書舎
【本体 3000円+税】

〈東アジアに知られる玄奘三蔵〉

この物語の発端は、今から一四〇〇年ほど前の中国・唐代に遡る。天竺（現在のインドに相当する）へ向かい、仏教経典や仏像を中国に持ち帰った玄奘（六〇二―六六四年）が主役である。三蔵法師として知られる玄奘は、インドで派生した仏教の経典を漢文へ翻訳し、シルクロードを経て日本に伝えられた大乘仏教の道筋を切り開いた仏教史にとって重要な人物の一人である。仏跡巡拝を記した「大唐西域記」は、後の世に物語「西遊記」となった。この「道のり」は、孫悟空や猪八戒、沙悟浄など個性的なキャラクターとともに、東アジアに広く知られている。現代社会においても、玄奘を崇拜する者は少なくない。

〈今も続く西遊記〉

こうした私たちの聞いたことのある物語とは少し趣きが異なっているのが本書である。玄奘の人物像や業績は直接的に扱われていない。主なテーマは、玄奘を信奉する者たちによる、遺骨の奉安（分骨）である。戦中から戦後、現代にかけて行われた分骨は、「争奪戦」ともいうほどの迫力を持って行われた。その遺骨奉安の実情に迫るべく、著者は日本や中国で発行された当時の新聞資料や仏教書、外交資料、檔案（中国の公式文書）文書など一次資料を丹念に調査した。資料の掘り起こしによって学術的な裏付けを行い、東アジア関係史を明らかにした。そして、「新たな西遊記」の存在を世に知らしめたのである。

〈始まりは遺骨の発見〉

日中戦争中の一九四二年、日本陸軍が中国・南京城外で玄奘遺骨を埋葬したと思われる石棺を発見した。その後、遺骨を「汪兆銘政府」（南京政府）に返還し、現地に三蔵塔を建立して埋葬した。そして、一九四四年に遺骨の一部が「汪兆銘政府」から日本に分骨されるという経緯を辿った。

歴史学の一般的な認識によると、「汪兆銘政府」は日本軍の傀儡政権であったと理解されている。そうした事実を背景

に、この時の日本への分骨は「日本軍によって略奪された」と見るのが現在の中国や台湾における一般的な史観である。著者は、こうした認識に一石を投じる歴史を提供するとともに、戦後に日本（埼玉、青森、兵庫など）、中国、台湾といった具合に分骨が拡がっていった事実を取り上げ、そこで繰り広げられた駆け引きを読み解く挑戦をしている。

〈提供する視座〉

本書の構成から全体像を確認しておこう。

序章 三つの『西遊記』／玄奘はなぜ日本にやってきた

のか

第一章 玄奘、南京で発見される／遺骨の発見と日本分骨の謎／玄奘の遺骨は本物か？／玄奘塔の再建と日本への分骨

第二章 玄奘、日本へわたる／西遊記の玄奘さま、慈恩寺へ／水野梅暁と玄奘／玄奘三蔵霊骨塔の完成／奘公の舍利いずこに在りや？

第三章 玄奘、台湾へわたる／高森隆介と玄奘の遺骨／戦後台湾の「中国仏教会」／台湾への分骨

第四章 玄奘、日本各地を旅する／藤井草宣と菅原恵慶

の告発／埼玉名栗の鳥居観音／大阪岸和田の靖
靈殿／青森弘前の忠靈塔／青森浪岡の薬王院／
兵庫篠山の少林寺

第五章

玄奘、中国で政治に翻弄される／玄奘、中国各
地を旅する 南京 北京 天津 四川 広州／
玄奘、中国革命に翻弄される

第六章

玄奘、日本と中国そして台湾を結ぶ／日華仏教
文化交流協会の成立／奈良の薬師寺／台湾の玄
奘大学

多くの読者にとってなじみのない単語が目につく目次では
ないだろうか。玄奘は知っていたとしても、聞いたこともな
い固有名詞もあるだろう。それら登場人物の多くは近現代仏
教史、それも専門的に学んでいるような者にしか知られて
いない仏教家が多い。例えば、水野梅暁（一八七七一―一九四九）
という人がいる。玄奘遺骨の分骨に重要な役割を果たした彼
は、上海にあった東亜同文書院の出身という経歴を生かして
「仏教交流」を行った。外務省の存在が背後に見え隠れする「日
中交流」は、宣撫工作的な意味合いもあった。こうした日中
戦争中の「日中交流」の問題が本書の第一章と第二章で取り
上げられている。

〈文化冷戦について〉

本書の真骨頂は、戦後の動向を明らかにした点にある。第
三章「玄奘、台湾へわたる」以降の章は、戦後の日・中・台の
国際関係の中で翻弄される遺骨や、各国の仏教界の戦後の姿
を取り上げている。読み解くキーワードは「文化冷戦」である。

第二次世界大戦後、世界を二分して繰り広げられた冷戦。
アメリカを中心とする資本主義勢力とソビエト連邦など共
産・社会主義国家との間にあった武力行使無き戦争状態は、
軍事、外交、経済だけでなく、文化的な面でも対立構造を有
していた。「文化冷戦」を扱った先行研究には貴志俊彦・土
屋由香編『文化冷戦の時代——アメリカとアジア』（国際書
院、二〇〇九年二月）があるが、ここに提供されている切り口
と同様な構図が、仏教文化にも存在したことを本書は示唆し
ているのである。

「文化冷戦」とは、それぞれの国家や地域が持っている「文
化の内容そのものの対立」という意味ではない。文化的な面
を直接的に批判し合うといった類のものでもない。文化をめ
ぐる攻防の背景に、「冷戦構造」が認められるという視座な
のである。そして、この「冷戦構造」が仏教文化交流に影響
しているのではないかという仮説をもとに、本書が構成され
ているのである。

〈台湾の「中国仏教会」〉

本書が示す「文化冷戦」を一つ紹介しておこう。一九五二年に主権を回復した日本は、台湾と国交を結び台湾の中華民国を「中国」と認識した。一方で、中国大陸に成立した中華人民共和国を認めなかった。その為、日本で行われた第二回世界仏教徒会議（WFB、一九五二年）で「中国」の代表として招待されたのは、台湾の「中国仏教会」だった。台湾は、敗戦まで日本の植民地となっていたため、この頃の「台湾仏教」は、いわゆる「日本風」だった。一九四九年の中華人民共和国の成立に伴って、蒋介石が台湾に撤退すると、中国大陸から中国人僧侶も渡ってきた。そして、彼らが台湾で「中国仏教会」を成立させた。肉食や妻帯を公然に行う「日本風」の仏教を批判し、「脱日本仏教」の方針を進めた。政治的な色合いを持っていた「中国仏教会」は、このWFBで「中国共産党による宗教弾圧」を訴えるなどの行動に出た。しかし、結果として台湾の主張は空振りとなった。その理由について「WFBの主要な参加国はセイロン、ビルマ、インドなどの上座部仏教諸国で、これらの国の政府は既に中国を承認していた」からであったと著者は分析している。

こうした政治と仏教の關係に注目することによって、「文化冷戦」を明らかにしたのである。

〈玄奘の表象〉

以上のように本書の特徴に言及してきた中で言えることは、東アジア關係史を専門とする著者ならではの問題意識が随所に生きていることである。もし、仏教を専門とする者がこの課題を取り上げたのであれば、遺骨奉安の思想的側面に偏ってしまっただろう。遺骨を奉安することは是非を問うようかのように。

この点について、著者が「なぜ、仏教徒が仏陀の教えに反して、修行完成者の遺骨の供養（崇拜）にかかずらっているのだろうか」といった、思想的な疑問を持っていることは本書を一読すれば、すぐに理解できる。その問題意識をより鮮明に本書に反映させ、「新しい玄奘物語」に人間臭さを付加することによって、「なぜ分骨にこだわったのか」という疑問に幅広い想像を膨らますこともできたと思うが、問題提起の範囲内に留めて客観性を重視したことによって、かえって内容の信頼性を高めたと言える。いうならば、どこまでも仏教を客観的に捉えようとする眼差しで、誰も知らない玄奘の表象を浮かび上がらせたのである。

（にいの・かずのぶ 同朋大学仏教文化研究所客員研究員）